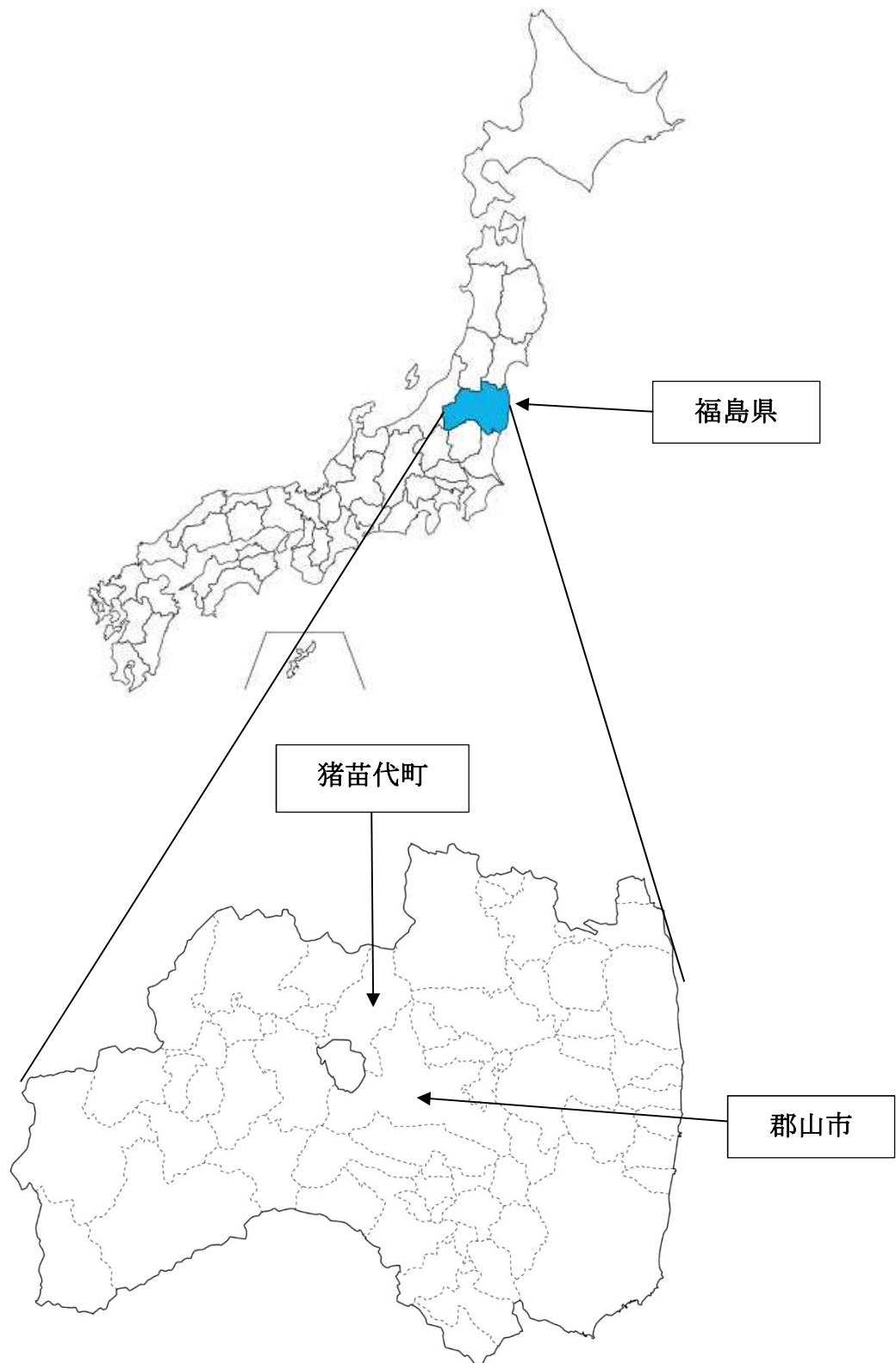


① 申請者	◎郡山市 猪苗代町	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
未来を拓いた「一本の水路」－大久保利通“最期の夢”と開拓者の軌跡 郡山・猪苗代－			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
<p>明治維新後、武士の救済と、新産業による近代化を進めるため、安積地方の開拓に並々ならぬ想いを抱いていた大久保利通。夢半ばで倒れた彼の想いは、郡山から西の天空にある猪苗代湖より水を引く「安積開拓・安積疏水開さく事業」で実現した。</p> <p>奥羽山脈を突き抜ける「一本の水路」は、外国の最新技術の導入、そして、この地域と全国から人、モノ、技を結集し、苦難を乗り越え完成した。この事業は、猪苗代湖の水を治め、米や鯉など食文化を一層豊かにし、さらには水力発電による紡績等の新たな産業の発展をもたらした。</p> <p>未来を拓いた「一本の水路」は、多様性と調和し共生する風土と、開拓者の未来を想う心、その想いが込められた桜とともに、今なおこの地に受け継がれている。</p>			
<div style="display: flex; justify-content: space-around;">   </div>			
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	郡山市文化スポーツ部文化振興課 主査 大高 陽子 郡山市文化スポーツ部国際政策課 主査 江連 直幸 郡山市教育委員会教育総務部生涯学習課 主査 國分 俊徹		
電 話	024-924-2661	FAX	024-935-7834
E-mail	bunkashinko@city.koriyama.fukushima.jp		
住 所	福島県郡山市朝日一丁目 23 番 7 号		

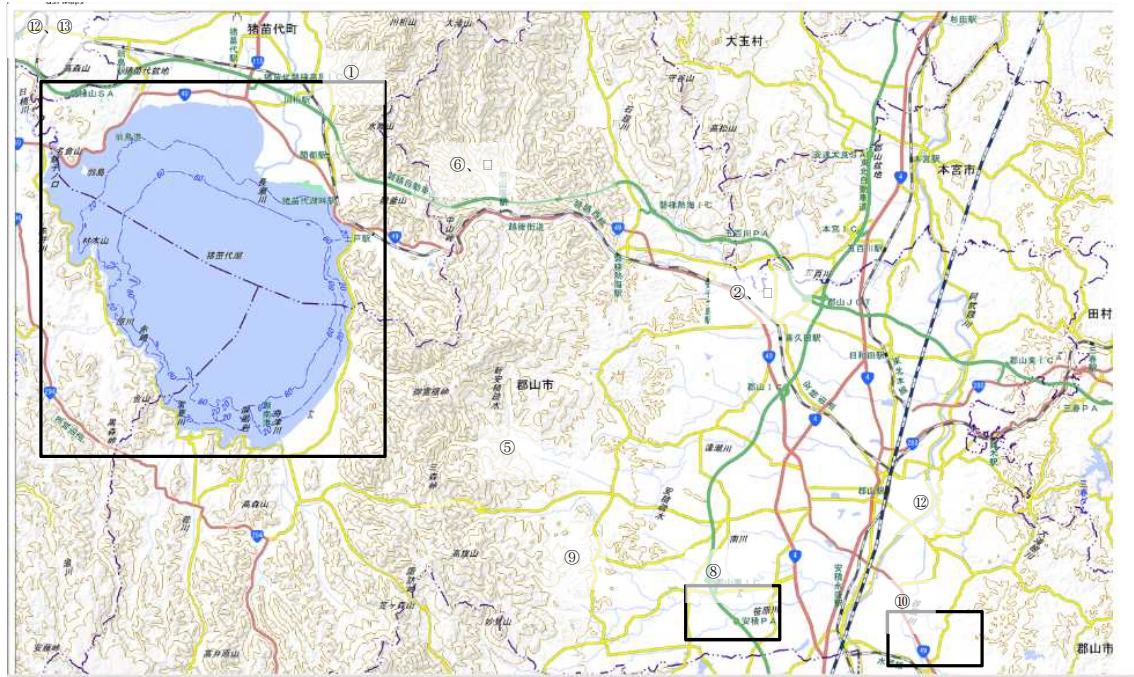
市町村の位置図（地図等）



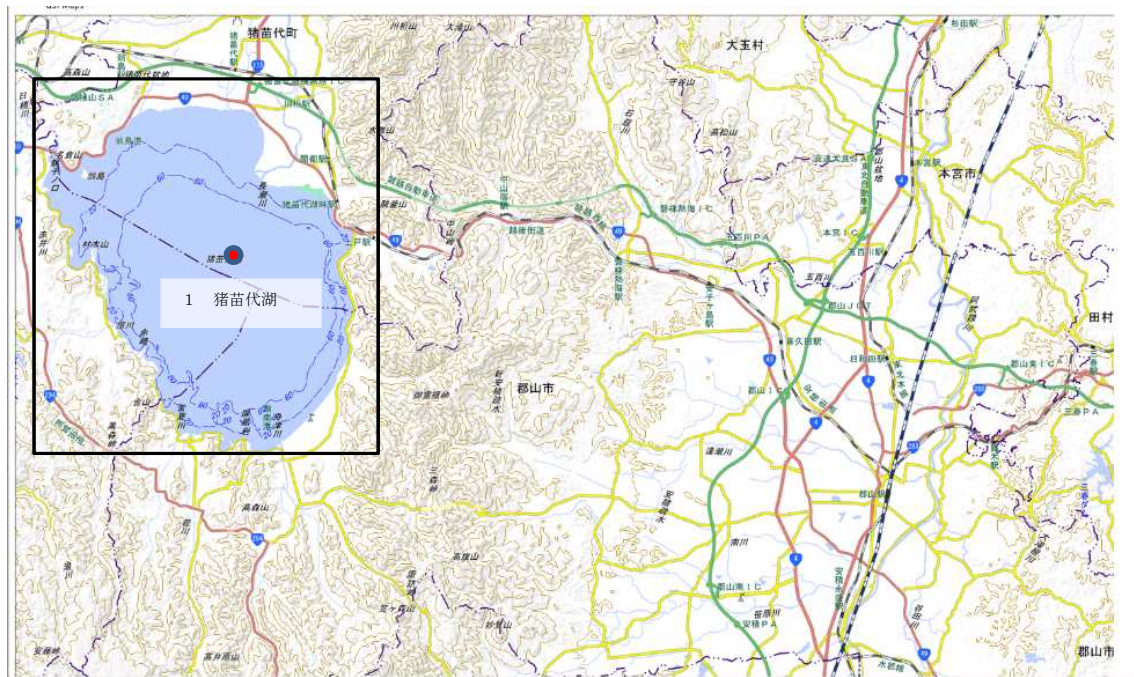
構成文化財の位置図（地図等）

※構成文化財がある地域を拡大し、構成文化財の位置を示す
(様式 3 - 1 の番号に対応させること)

【全体図】(①～⑬は各地域の地図を示している)



①



出典：国土地理院ウェブサイト (<http://maps.gsi.go.jp/>)
地理院地図を加工し作成（以降のページの地図全て同様である）

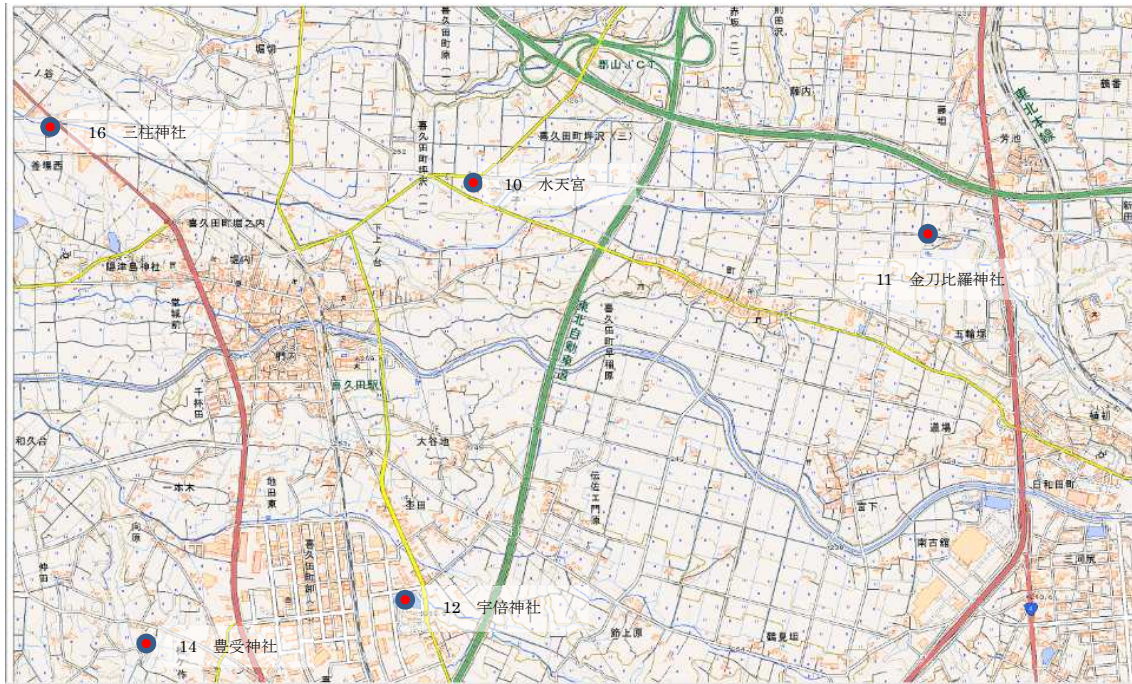
②



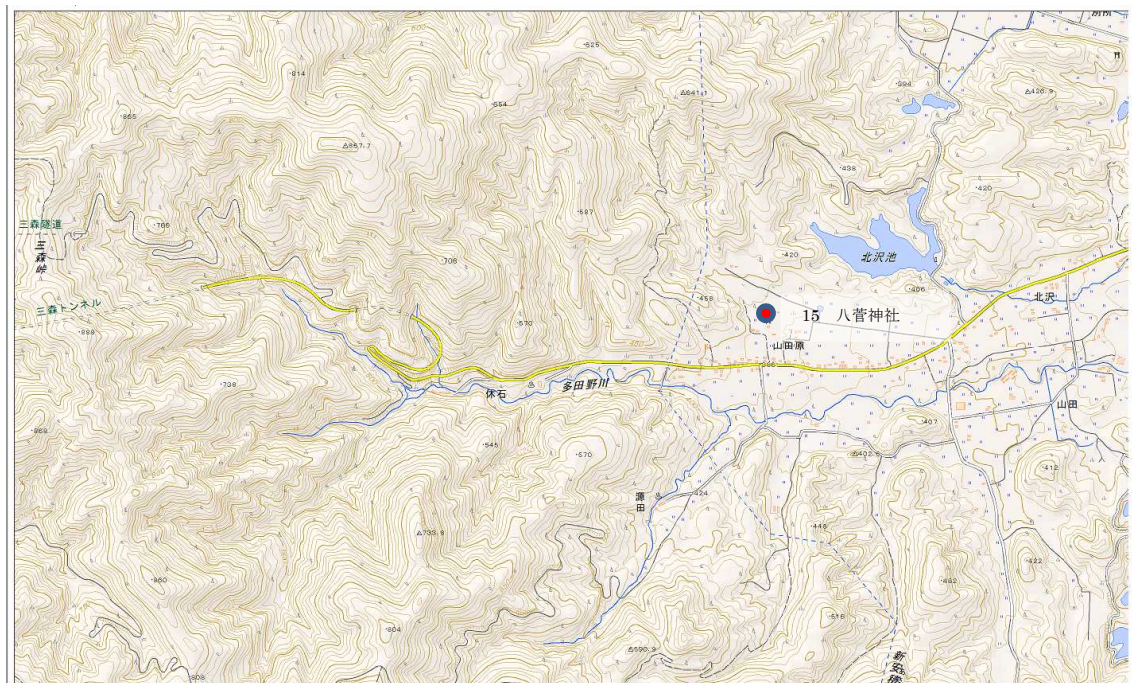
③



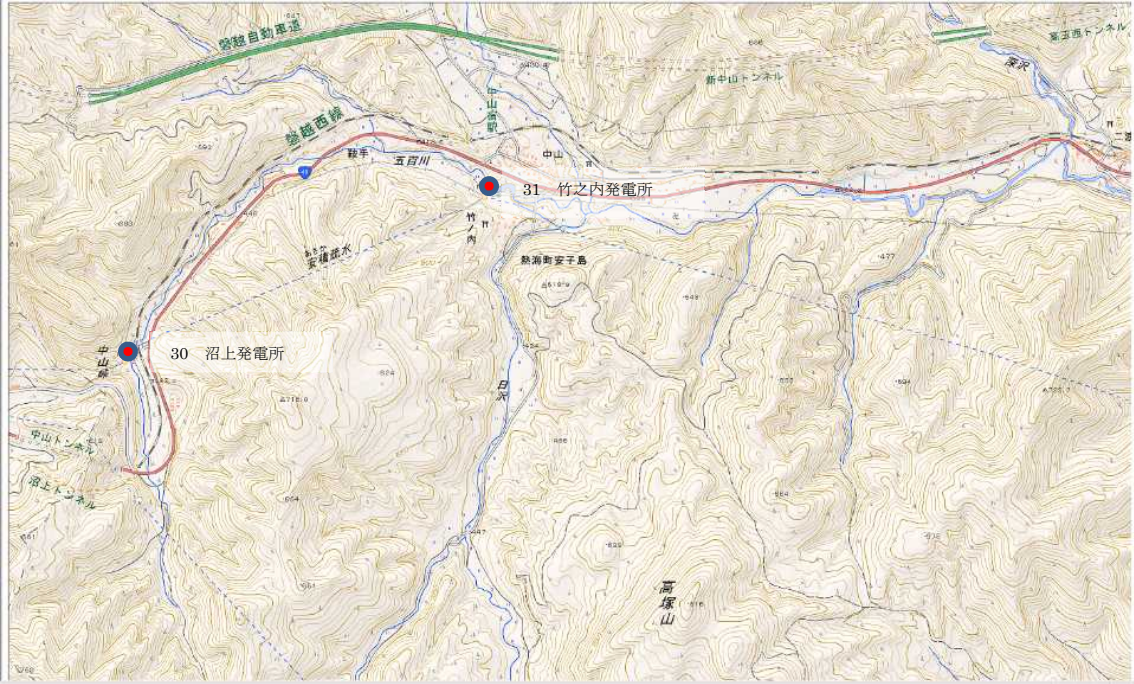
④



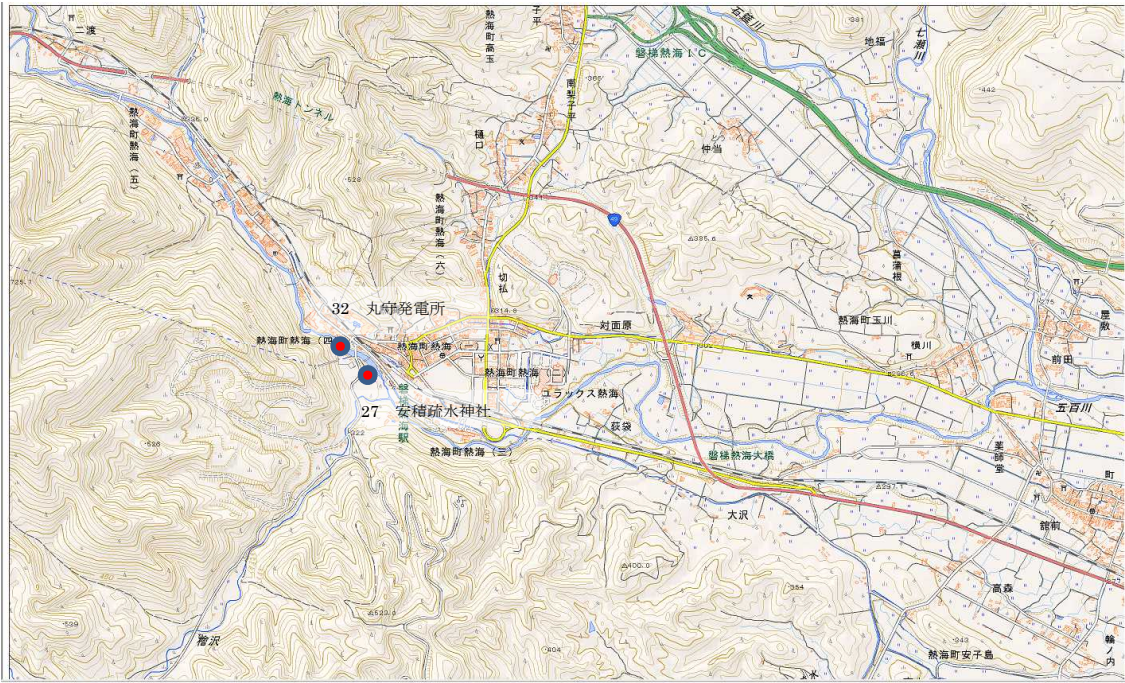
⑤



⑥



⑦



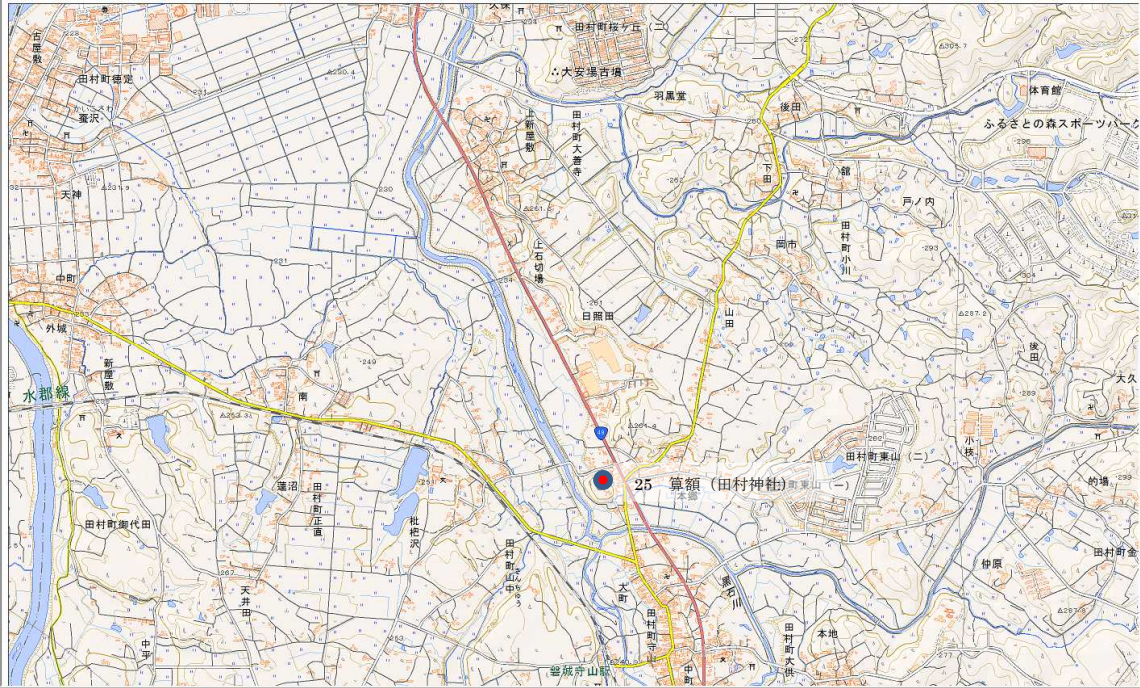
⑧



⑨



⑩



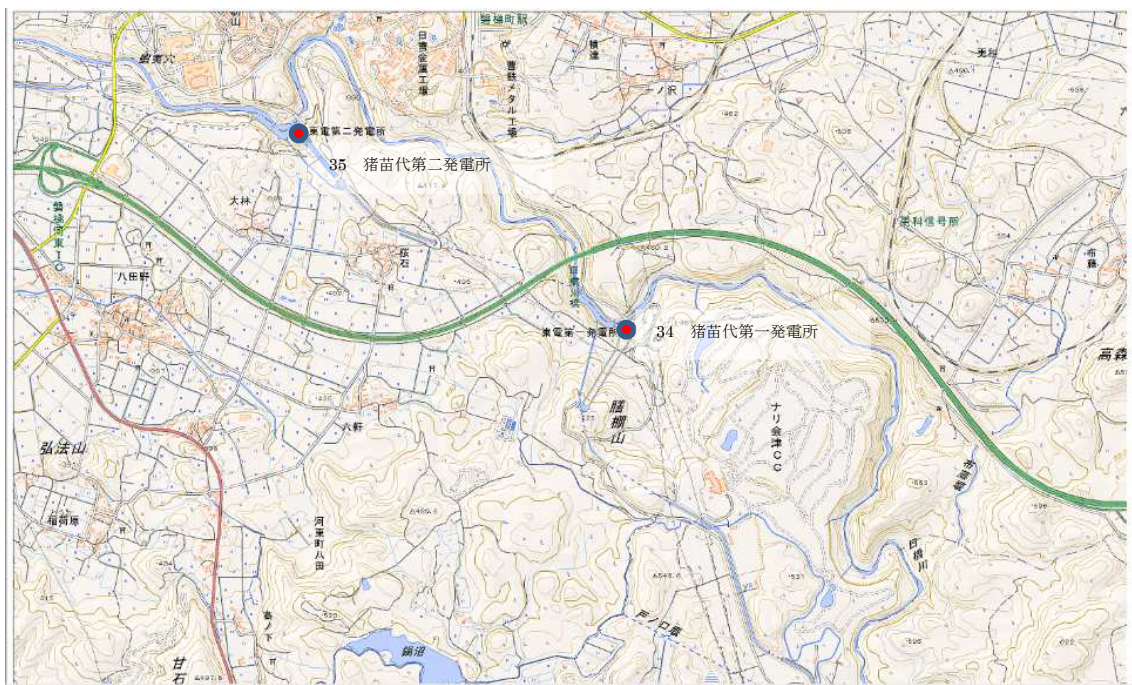
⑪



⑫



⑬



※複数ページにわたっても可

ストーリー

【安積原野へは流れない、あこがれの湖】

郡山（安積地方）から西の天空（標高 514m）にあり、豊富な水を湛え、天を映し出す鏡のような美しい湖、猪苗代湖。郡山には、「猪苗代湖の水を安積原野へ」という疏水開さくの構想が江戸時代から存在していた。枯渇した原野が広がり、人々は水を巡って争い、雨乞いや豊作の思いを込めた花火を打ち上げ、祈りを捧げていた。しかし、猪苗代湖の水は西側へのみ流れ、奥羽山脈がそびえる東側の安積原野には流れなかった。加えて水利の問題があり、疏水開さくは夢物語であった。



猪苗代湖

【大久保利通、安積の地に“夢”を見る】

明治維新という近代化へのかつてない改革があった日本。明治 4 年（1871）、岩倉使節団は近代化を推進するため、欧米諸国を約 1 年 10 か月かけて視察した。そして欧米の発展を目の当たりにし、国力の差に圧倒させられる。彼らは、経済力と軍事力を備えるため「富国強兵」をスローガンとし、新産業の育成を目指す「殖産興業」の進展が急務と痛感した。この使節団に、安積原野の開拓を大きく左右する後の福島県令・安場保和と、内務卿・大久保利通が参加していた。彼らは、開拓と産業振興が発展の源であると確信を得る。そして、安場はひと足先に帰国し、さっそく福島県の開拓に着手した。

明治 6 年（1873）、福島県の開拓に呼応した地元富商たちは、「開成社」を結成し、本格的な開拓に乗り出した。灌漑用の沼の整備や葡萄など海外果樹の植樹、西洋農具を用いた斬新で近代的な西洋農法を導入した開拓地は、収穫量や人口の増加により、新村が誕生するまでに至る。一方では、開拓事務所に置かれた「開成館」は西洋風の建物を地元の大工たちが錦絵等をもとに、見よう見まねで作ったその象徴的な建物であった。また、開成社員は洋服を身に纏い、積極的に西洋文化を取り入れつつ開拓を進めた。ここに、慣習に囚われず、新たなものを受け入れ調和する進取の気質があったことが感じられる。



洋服を着た開成社員

明治 9 年（1876）、明治天皇の東北巡幸の下見に来た内務卿・大久保は、福島県と開成社が進めてきたこの官民一体の開拓事業の成功に感激する。大久保は、「殖産興業」と改革で困窮した武士を救う「士族授産」を結び付けた全国的なモデル事業を、他の候補地に先駆け、広大な原野を有する安積の地で実施することを決断した。この地には、東西南北に通じる交通の要衝、豊富な水を湛える猪苗代湖、そして進取の気質を持った開拓者が存在していたからである。こうして大久保は、明治 11 年（1878）3 月に事業案を提出し、政府は予算を計上した。しかし、事業開始目前、大久保は暗殺されてしまったのだ。彼は亡くなる直前まで当時の福島県令と会い、開拓にかかる想いを熱く語っていたという。

この大久保の“夢”は、開拓者やその想いを知る人々によって、明治政府初の国営農業水利事業「安積開拓・安積疏水開さく事業」として実現されていくのである。

【新たな挑戦、そびえる山脈と時代を切り拓く】

明治 11 年 11 月の九州・久留米藩を皮切りに、主に全国 9 藩から旧士族と、その家族約 2,000 人が刀を捨て、原野を開拓しようと入植してきた。入植者たちは、困難が予想される新たな土地での心の拠り所として、故郷の神社などからの分霊を受け、力を合わせ開拓に臨んだ。特に、人心融和のため伊勢神宮から当時唯一の御分霊を許された「開成山大神宮」は、人々の心の拠り所となっていたのであった。

明治 12 年（1879）、この大神宮で、かつてない大工事の安全と成功を祈願する起工式は行われた。始めに着手したのは、安積疏水成功のカギを握り、会津盆地と安積原野の水の流れを調整する「十六橋



「水門」の建設であった。革新的だったのは、オランダ人技師ファン・ドールンの監修のもと、近代土木技術を我が国で初めて疏水の設計に導入したことである。当時最先端の機器が用いられ、実測データに基づき科学的に検討するという従来の経験主義を脱却した草分け的な設計であった。この検証により、安積原野へ水を流しても、西側へ流れる水量は減らないことが実証され、水利という長年の大きな課題を解

決に導いた。また、猪苗代湖の氾濫に苦しんでいた湖岸の住人達は、十六橋水門が治水の役割も持つことを知り、遠く離れた地からボランティアとしてこの工事に参加した。その人数は500人以上にのぼり、この大工事を1年程で完成させた。水路工事の最大の難関は、奥羽山脈に全長585mのトンネルを掘り、安積原野まで水を一気に流すことであった。硬い岩石を砕くダイナマイト、地下水を外に汲み出す蒸気ポンプ、補強のためのセメントなど、外国の最新技術が使われていった。また、鹿児島、大分、東京、横浜、岩手、新潟など全国から多くの技術者たちが集ってきた。開拓者たちの安積原野と猪苗代湖を繋ぐ挑戦は、疏水通水へと結実し、後の那須疏水と琵琶湖疏水の建設に大きな影響を与えたのである。

【潤いと発展をもたらした猪苗代湖、“夢”の礎となった風土】

明治15年(1882)、約3年で、述べ85万人の労力と当時の国家予算の約1/3を要した水路52.1km、分水路70.2kmの安積疏水は完成した。その通水式には政府要人らをはじめ数万人が集い、事業の成功を祝った。

安積疏水は大地を潤し、約4,000haだった米の作付面積は、最大時に10,000ha以上へと広がった。収穫量は約4,500tから10倍以上へと大幅に増え、実り多き大地へと生まれ変わっていった。また、清らかな水が一年中流れるようになり、鯉の養殖が盛んになった。それぞれ生産量が全国市町村で1位になるほど、食文化を豊かにしている。



明治後期からは、疏水の落差を発電にも活かすため、当時の最高技術を結集し、「沼上発電所」が建設された。そこから、23kmも遠く離れた郡山に11,000vの高压電力を送るという、我が国初の長距離高压送電を成功させ、日本中を驚かせた。この電力は製糸、紡績など郡山の産業を発展させていった。その後、十六橋水門を活用し、猪苗代湖の西側に建設された新たな発電所から関東への送電は、当時世界第三位の長距離送電と謳われ、近代日本を支えた。そして、開拓により人が集い、将来の叡智を育むための学校が作られ、やがて銀行の設立や鉄道の開通にも結び付いていった。

「安積開拓・安積疏水開さく事業」は、交通の要衝、全国と世界から人、モノ、技術、更には文化等の多様性を受け入れ、調和し、共に生きるという、この地の風土が大きく活かされ、成し遂げられた。それらは、農業・工業・商業の飛躍的な発展を通じて今も受け継がれており、日本の近代化を実現するため、この事業への熱い想いを語っていた、大久保利通の“最期の夢”を叶える礎になったのである。

【開拓者たちの想い、未来に花咲く】

全国から集った入植者や技術者、政府、そして安積の地に生きた人々が、ともに切り拓いた安積開拓。かつて、福島県と開成社が開拓を進めていた折、灌漑用の沼の堤に、約3,900本の桜を植えた。現在でも、開拓の歴史を見守ってきたソメイヨシノの老木は、春になると開成山公園の土手一帯を覆い尽くす。



開成社の社則に、「私たちの代では小さな苗木でも、やがて大樹となり、美しい花は人々の心を和ませるであろう」との想いが込められた一文がある。この未来を想う心が、新しい時代を拓いたといっても過言ではなく、その想いは今なおこの地に息づいている。

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	猪苗代湖 いのわしろこ	未指定	猪苗代湖の水の恩恵を受けるべく、安積開拓・安積疏水開さく事業が行われた。標高が 514m と高い位置にあるため、自然落差を利用し、農業用水や生活用水が供給された。また、水力発電の発展にも貢献し、近代化への礎を築いた。	郡山市 猪苗代町
2	富岡の唐傘行灯花火 とみおか からかさあんどんはなび	市無形	明治初期から始まった花火で、雨乞い、豊作、家内安全を祈願するもの。閉じられた傘が開き、光が雨のように降り注ぐという全国でも珍しい花火である。	郡山市
3	安積開拓発祥の地 あさかひたくはつしょうのち	市史跡	福島県開拓掛が設置された施設「開成館」や開拓の入植者の住宅があり、近代郡山の発展の礎となった安積開拓・安積疏水開さく事業の中心地。	郡山市
4	安積開拓官舎 一旧立岩一郎邸一	市重文 (建造物)	安積開拓時に設置された「福島県開拓掛」の職員用官舎。明治天皇の御巡幸の際には、政府高官の宿泊所にもあてられた。	郡山市
5	開成館 かいせいかん	県重文 (建造物) (近代化産業遺産)	安積開拓時の郡役所で、ここに福島県開拓掛が設置された。地元の大工が錦絵や建物の見聞を通じて得た情報で、見よう見まねで建設された。後に県立農学校にも使用され、明治天皇の 2 回にわたった東北御巡幸の際には、行在所（宿泊所）にもなった。	郡山市
6	金透記念館 きんとう きんねんかん	未指定	開成館と同じ「擬洋風建築」で建設された小学校。明治 9 年 (1876 年) の明治天皇東北御巡幸の際には、休憩所として使用された。随行した木戸孝允が「金透学校」と命名し、木戸の日記には、開成館や西洋農法が導入された開	郡山市

			拓地とともに、驚きをもってその様子が記されている。現在の建物は、移築復元されたもの。	
7	五十鈴湖 いすずがわ	未指定	開成山地域の開拓が行われた際に、灌漑用の池として造成された。伊勢神宮の御分霊を受けた開成山大神宮の前にある池であったため、伊勢神宮の前を流れる「五十鈴川」にちなんで命名されたという。	郡山市
8	大久保神社	未指定	安積疏水の開通に尽力した大久保利通を称えて建立された神社。神社となっているが、実際には鳥居や社殿はなく、顕彰碑が存在している。	郡山市
9	久留米水天宮 く る め すい てん ぐう	未指定	久留米藩からの入植者のために、故郷の水天宮の御分霊を奉遷した神社。建築費寄附名簿には、三条実美、伊藤博文、大隈重信、松方正義、岩倉具視など、当時の政府高官の名が並んでいる。	郡山市
10	水天宮	未指定	水天宮の御分霊を奉遷したもう1つの神社で、喜久田町に存在している。久留米の開墾地は南北に分かれ、この水天宮は北に位置している。当時は子どもの遊び場や、疏水の水盤屯所に使用されており、開拓者の憩いの場所になっていた。	郡山市
11	金刀比羅神社 こ っ ち び ら	未指定	久留米藩からの入植者が祀った神社で、当時久留米から長い船旅を経て、安積開拓の地に到着したことから、船の神を祀っているとされている。	郡山市
12	宇倍神社 う べ	未指定	鳥取藩からの入植者のために、故郷の宇倍神社の御分霊を奉遷した神社。当時氏子の資格要件が厳しく、移住士族とその分家だけが氏子となり、一般入植者や小作人たちは氏子になれなかったといわれている。	郡山市

13	安積開拓入植者住宅 —旧坪内家—	未指定	安積開拓のため、鳥取藩の入植者が結成した「鳥取開墾社」の副頭取の住宅。明治政府が入植者の住宅用補助金を交付し建築された5つのランクの住宅の中でも最上級の設計による建物。	郡山市
14	豊受神社 とようけ	未指定	土佐藩の入植者のうち、西原に入植した者が祀った神社。はじめは伊勢神宮の遥拝所 <small>ようはいじよ</small> を設けていた。ここに移住した人達のほとんどが神葬祭で仏葬祭はあまりないといわれており、付近の地域には見られない習慣がある。	郡山市
15	八菅神社 やすが	未指定	土佐藩からの入植者が崇めた菅原道真と、地元の農家が祀っていた八幡太郎を合祀し、八幡と菅原の1字ずつとってできたといわれる神社。異郷に移って生活の喜びや娯楽に乏しかった入植者たちにとっては、神社の祭礼は唯一の楽しみとなっていた。	郡山市
16	三柱神社 みつはしら	未指定	主に棚倉藩からの入植者が建立した神社で、「お互いの心を統一し、団結を強固にする」ために、開墾にあたり神の御加護を祈ったものであるとされる。	郡山市
17	三嶋神社 みつしま	未指定	松山藩からの入植者のために、故郷の三嶋神社の御分霊を奉遷した神社。移住者の大半が小作人となったため、境内も狭く社殿もなかったといわれる。	郡山市
18	安積開拓入植者住宅 —旧小山家—	市重文 (建造物)	安積開拓のため、松山藩の入植者が結成した「愛媛松山開墾」の18戸の中で唯一現存する住宅として復元・保存されている。当時の松山の一般的な民家は、「四間×六間（しろくのま）」、囲炉裏がなく、炊事場も屋外だったといわれ、それが色濃く残っている。	郡山市
19	開成山大神宮 かいせいざんだいじんぐう	未指定	安積開拓で入植した者たちの心の拠り所として設置された神社。伊勢神宮からの御分霊を祀っており、「東北のお伊勢さま」と呼ばれている。	郡山市

20	太刀 勝光 たち かつみつ	市重文 (工芸品)	伊勢神宮からの御分霊を受けた際に、御神宝として贈られた太刀。備前国長船に住んでいた、室町時代の刀匠勝光の作である。	郡山市
21	槍 銘 国綱 やり めい くにつな	市重文 (工芸品)	太刀 勝光とともに、伊勢神宮からの御分霊を受けた際に、御神宝として贈られた槍。安土桃山時代の作といわれている。	郡山市
22	十六橋水門 じゅうろっきょうすいもん	未指定 (近代化産業遺産)	安積原野へ水を流すために、猪苗代湖の水位を調整する水門。安積疏水工事で一番初めに工事が始まった。16 の石造のアーチでできており、当時の日本では長大な水門であった。安積開拓・安積疏水開さく事業のシンボリック構造物で、弘法大師が 16 の塚を築いて通行できるようにして、村人の不便を救ったとの逸話もある。	猪苗代町
23	トランシット	未指定	安積疏水工事の測量で使用されたフランス製の測量機器。当時は約 664 円（現在の約 2,600 万円）という大変高価なもので、水平角と鉛直角を精密に測定した。西を示すコンパスの針が「W」ではなく、「O」となっているのが昔ならではの珍しい特徴。	郡山市
24	レベル	未指定	安積疏水工事の測量で使用されたイギリス製の測量機器。高低差を精密に測量した。	郡山市
25	算額 (田村神社) さんかく (たむらじんじゃ)	市有形	日本古来の和算は、西洋数学の採用により廃止されてしまったが、郡山の和算家は、安積開拓や安積疏水の土地測量・水量計算に大活躍したといわれている。和算の水準と研究者の分布を知ることができる学術上も貴重な文化財である。	郡山市
26	算額 (稲荷神社) さんかく (いなばじんじゃ)			
27	安積疏水神社 あさかそすいじんじや	未指定	安積疏水の守護神とされ、当時の工事作業員が、現地に向かう際に必ず立ち寄り、その日の安全を祈ったとされる。	郡山市

28	はやまこうえん 麓山公園	未指定	明治 15 年（1882 年）に安積疏水の通水を盛大に祝った公園。当時、園内には数百ものちょうちんが掲げられ、山車を備えた歌舞伎の催しや、花火の打上げなどにより、数万人の人が集まり未曾有の賑わいをみせたとされる。国登録文化財である「安積疏水麓山の飛瀑」があり、日本で初めて商人が造った公園とも言われている。	郡山市
29	あきかそすい はやま ひばく 安積疏水麓山の飛瀑	国登録	明治 15 年（1882 年）に郡山の開成社等の有志が安積疏水の通水を記念して造った滝。安積疏水事業の記念碑的建造物で、安積疏水の最終地点、麓山公園の一角に築かれた石造構造物。当時右大臣だった岩倉具視が「農業用の施設を鑑賞用に使うとは何事か」とこの滝を見て激怒したが、実は勘違いで製糸業の動力源として利用するためのものだったという逸話もある。	郡山市
30	ぬまがみ 沼上発電所	未指定 (近代化産業遺産)	明治 32 年（1899 年）に、猪苗代湖と安積疏水の落差を利用して造られた水力発電所。日本初の高圧電力の長距離送電により、郡山市の紡績や繊維産業の発展に大きく貢献した。	郡山市
31	たけのうち 竹之内発電所	未指定 (近代化産業遺産)	沼上発電所と同様、猪苗代湖と安積疏水の落差を利用して造られた水力発電所。人口増加による家庭への電力供給を増やすため、大正 8 年（1919 年）に運転を開始した。	郡山市
32	まるもり 丸守発電所	未指定 (近代化産業遺産)	沼上、竹之内発電所と同様に造られた水力発電所。大正 10 年（1921 年）に運転を開始し、竹之内発電所と同様に人口増加による家庭への電力供給を増やすことを目的とした。	郡山市
33	じんじょう 旧福島県尋常中学校本館	国重文 (建造物) (近代化産業遺産)	安積開拓・安積疏水開さく事業により産業が発展し人口が増加した。継続的な発展のための人材育成を目的として設置された。農民が土地を寄附した	郡山市

			ことや、安積開拓が県民の大きな関心事となっていたため、福島県の中でもこの地に設置されたといわれる。	
34	猪苗代第一発電所 <small>いのわしろ</small>	未指定	大正 3 年 (1914 年) に運用開始となった水力発電所で、初の 110kV 送電が行われたことにより、当時の日本の中心を支えていた。	会津若松市 【所有者】 東京電力株式会社
34	猪苗代第二発電所 <small>いのわしろ</small>	未指定	大正 7 年 (1918 年) に運用開始となった水力発電所で、猪苗代第一発電所と同様、ここからの送電によって、当時の日本の中心を支えていた。赤レンガの外壁が特徴的で、建物は東京駅を設計した辰野金吾博士が当初に監修している。	会津若松市 【所有者】 東京電力株式会社
36	開成山の桜 <small>かいせいざん</small>	未指定	開拓用の池の堤を強化するために植樹され、開成社の社則に、花木の植樹を定めていたことが今へとつながっている。今でも約 1,300 本の桜が咲き乱れる県内でも有数の桜の名所。元国指定の名勝及び天然記念物でもあった。	郡山市
37	開成山公園 <small>かいせいざんこうえん</small>	未指定	開成社が開拓用に造った池がある公園。開成社の社則に定めた花木の植樹が生んだ桜の名所を有しており、郡山のシンボリック場所。	郡山市

(※ 1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※ 2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること (例：国史跡、国重文 (工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※ 3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること (単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※ 4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること (複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

1 猪苗代湖



4 安積開拓官舎―旧立岩一郎邸



2 富岡の唐傘行灯花火



5 開成館



3 安積開拓発祥の地



6 金透記念館



7 五十鈴湖



10 水天宮



8 大久保神社



11 金刀比羅神社



9 久留米水天宮



12 宇倍神社



13 安積開拓入植者住宅—旧坪内家



16 三柱神社



14 豊受神社



17 三嶋神社



15 八菅神社



18 安積開拓入植者住宅—旧小山家



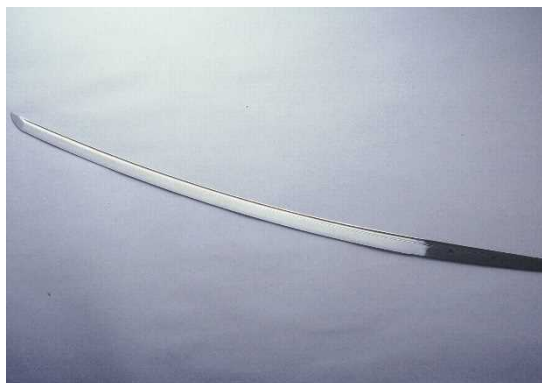
19 開成山大神宮



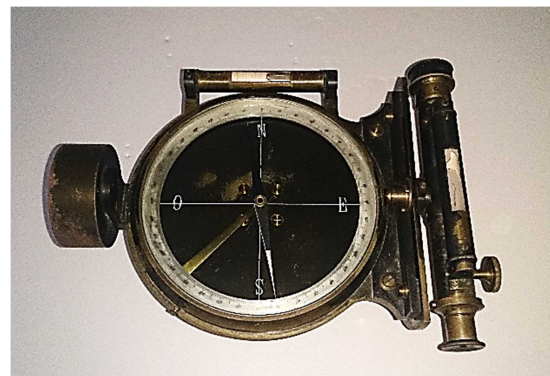
22 十六橋水門



20 太刀 勝光



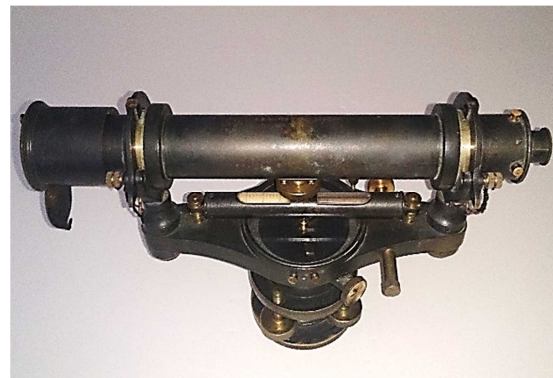
23 トランシット



21 槍 銘 国綱



24 レベル



25 算額 (田村神社)



28 麓山公園



26 算額 (稲荷神社)



29 安積疏水麓山の飛瀑



27 安積疏水神社



30 沼上発電所



31 竹之内発電所



34 猪苗代第一発電所



32 丸守発電所



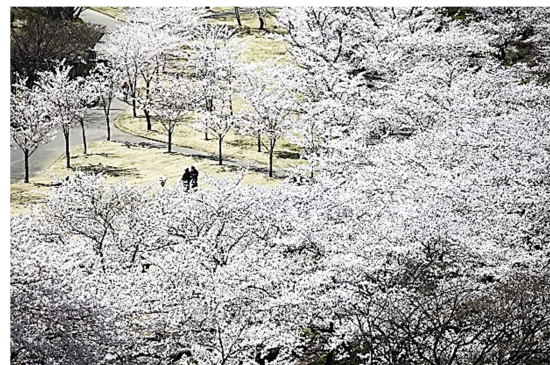
35 猪苗代第二発電所



33 旧福島県尋常中学校本館



36 開成山の桜



37 開成山公園

